The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	知足の説
Author(s)	小沼, 量平
Citation	懐徳. 1930, 8, p. 69-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88814
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

し人格の崇高なるを證して餘りあると謂はざるべからず。

終りに臨んで余の所編を綜括的に發表せんが爲めに、平素崇拜せる小野湖山翁の長詩を朗吟せん、唯憾むらくは、義公と湖山翁の時を同うして生れて其議論を上下せられざるを、

讀楠氏記有感偶作長句　　小野湖山

南技之蔭何繁盛。五十餘年護帝座。豈唯勳業冠中古。其人優爲王者佐。況復子姪臣從皆忠貞。求諸前古寡匹亞。人言正儀叛降穢其宗。我言此公處置出至忠。乃父乃兄相繼死。公而亦死誰折衝。三事料敵勢。一戰鼓兵氣。獨力足收京。幾回走賊帥。風雲變化數出奇。大廈寸木能自支。乃父遺命公敢忘　乃父兵法公深知。一進一退亦何常。含垢包羞眞男兒。史乘多成賊臣手。後人誰知公心悲。君不見南北議和統則更立禮則父子。此公當日不死之功至此顯然耳。嗚呼此公當日不死之功至此顯然耳。豈有河內公之子帶刀公之弟而爲叛降之士。

知足の說

小沼量平

曾文正公曰、知レ足天地寬、貪レ得宇宙隘と、故に古來聖賢君子と崇敬せらるるもの、皆足ることを知り止まることを知る、帝堯富んで驕らず貴うして舒らず、許由の賢なるを知りて天下を許由に讓らんとす、是れ止まることを知るにあらずや、許由貧賤に安んじ辭して受けず、曰く「鷦鷯巢二於深林一。不レ過二一枝一。偃鼠飲レ河。不レ過二滿腹一。」と是れ亦足ることを知るにあらずや、唐の張蘊古、太宗文武皇帝に大寶箴を獻じて云ふ有

り、壯二九重於内一。所レ居不レ過レ容レ膝。彼昏不レ知。瑤二其臺一而瑤二其室一。羅二八珍於前一。所レ食不レ過レ適レ口。惟狂罔レ念。丘二其糟一而池二其酒一。と、上其の言を嘉せり、此の箴訐由の言と事を殊にして指を同じうするもの知言と謂ふべし、孔夫子曰、富與レ貴。是人之所レ欲也。不レ以二其道一。得レ之不レ處也。と、然るに今や時俗の通病と云ふべきか、上下共に其の道を以てせざる、不義の富貴を欲求して手段方法を擇ばず、自己の位地を利用して一意貪欲を逞うせんとし、大臣大將にして賄賂を收受する者あり、巨商富豪にして密輸出入を企て脱税を謀る者あり、議員たらんが爲に投票を買收して法に觸るる者あり、大會社の重役にして背任横領の罪を犯す者あり、其他小にしては詐欺騙取强窃盗等枚擧に遑あらず、教化の陵夷紀綱の頽廢此の時より甚しきはあらず、思ふに是れ足ることを知らざるの致す所、予は茲に聖賢君子知足の教訓と其の行實を列擧して、貪慾飽くなきの人に鑑みる所あらしめんとす、老子三十三章に「知レ足者富」四十四章に「知レ足不レ辱。知レ止不レ殆」四十六章に「罪莫レ大二於可欲一。禍莫レ大二於不一レ知レ足。咎莫レ大二於欲一レ得。故知レ足之足常足。」と、聖書（バイブル）、提摩斐（テイモフィ）前書に「敬虔知レ足。利莫レ大。我出レ世無レ所二攜來一。逝レ世亦無レ所二攜去一。衣食足。宜レ知レ止。」と、また釋氏の法華經、普賢勸發品に「少欲知足。能修二普賢之行一。」と云ひ、維摩經、菩薩行品に「行二少欲知足一而不レ捨二世法一。」と云ふ、聖賢の教ゆる所夫れ斯の如し、若し足ることを知らざれば、千匱の財寶を積み、萬鍾の米粟を藏するも其の心底貧者に異ならず、足ることを知る時は、一簞の食一瓢の飲陋巷に在りと雖も其の樂を改めず、更に賢哲の出處進退を見るに、右大臣從二位兼中衛大將勳二等吉備眞備の骸骨を乞ふや、其の上啓の畧に曰く「伏乞致レ事。以避二賢路一。上戴二聖朝養レ老之德一。下遂二庸愚知足之心一。特望二殊恩一。祈二於矜濟一。云云」、詔曰。「昨省二來表一。即知告歸一。聖忌未レ周。懸車何早。悲驚交結。卒無二答言一。通夜思勞。坐而達レ旦。不レ依レ所レ請。似レ逆二謙光一。欲レ遂二來情一。彌思二賢佐一。云云」、また大納言從二位文室眞人大

市の骸骨を乞ふや、其の上表の署に曰く「臣以二愚質一。幸遇二聖明一。……貪レ榮負レ貴。……伏願避二路俊乂一。賜二老丘園一。止レ足以送二餘年一。云云」、詔曰。「卿年及二懸車一。告レ老言レ退。知レ足知レ止。合二於古誼一。思欲二抑留一。恐非二優老之道一。云云」と、眞備大市二老臣に對する　聖寵の優渥なる　恩詔感激に勝へざるなり、是れ二老臣知足の德の賚錫と謂ふ可きか、また前漢の疏廣の傳を覽るに「疏廣宣帝時。爲二太子太傅一。兄子愛爲二少傅一。太子每レ朝。因進見。太傅在レ前。少傅在レ後。叔姪並爲二師傅一。朝廷以爲レ榮。後廣謂レ受曰。吾聞知レ足不レ辱。知レ止不レ殆。功遂身退。天之道也。豈如下歸二老故鄉一。以二壽命一終上。叔姪遂乞二骸骨一。許レ之。上賜二黃金二十斤一。太子贈二五十斤一。公卿大夫。故人邑子。設二祖道一。供二張東都門外一。送者車數百兩。既歸二鄉里一。日具二酒食一。請二族人故舊賓客一。相與娛樂。輒賣レ金以供レ具。或勸レ買二田宅一。廣曰。吾顧自有二舊田廬一。令二子孫勤二力其中一。足二以供二衣食一。此金聖主所三以惠二養老臣一也。故樂下與二鄉黨宗族一。共饗二其賜一。以盡中吾餘日上。族人悅服。皆以壽終。」何ぞ其の心裏の高潔なるや、また明の馮公啓は知足歌六首を詠じて、足ることを知らざる者に訓諭するあり、文徵明は知福歌を作りて、「看レ上雖レ不レ如。比下當レ知レ足」と誨ゆるあり、予は茲に唐伯虎の不如歌を掲げて、予の知足說を結了せんとす、曰く「我不レ如レ人。我無二他福一。人不レ如レ我。我當レ知レ足。知レ足不レ辱。一飯兩粥。謝レ天謝レ地。平安是福。」と頃者時病に感ずる所あり、此の說を作る、

（昭和五年五月五日）

追記

昭和五年五月二十三日、堂友太田勘兵衛氏を介し、永田文學士より先君子磐舟永田翁傳を寄贈せらる、依て直ちに繙閱せしに、卷頭に磐舟先生自筆寫眞版の座右銘を揭載しあり、曰く「貪レ榮萬乘猶無レ足。退レ步一瓢還有レ餘。」と是れは賣茶翁の偈にして先生は之れを自書して座右の銘とせられしと云ふ、宜べなり先

生は利慾の念に虚しく、常に後輩を戒めて富を作るは宜しく大道濶歩的なるべし、予は南岳先生の「行不由徑」の論語の御講義を拜聽せし以來常に之を服膺せり、また人は成功と同時に相當の善行を爲すは人生の必要條件なりと云はれたり、我懷德堂の重建及維持發展に關しては、先生は理事長として數萬圓の私財を投じ、更に漢學奬勵資金として金五萬圓を寄附せられたるは、懷德堂を知る者の普く知る所にして、先生平生の持論を實行せられしものと謂ふべし、先生の詩に「一醉一吟獨倚欄。動中靜境有餘歡。風塵牛馬任人笑。知分老來心自寛。」と先生知分知足の心境實に光風霽月の如し、茲に知足說に追記して、先生の座右銘を堂友諸彦に披露すと云爾

山國紀行

小沼量平

昭和五年六月八日、皇陵巡拜の爲め丹波國山國村に向ふ、大阪皇陵巡拜會創立者小林利昌翁外一行七十餘名、午前八時京阪電車急行にて天滿橋を發し、同九時京都三條停留所着、直ちに六人乘自動車十三輛に分乘して、先づ京都府葛野郡花園村に至り、第五十八代光孝天皇後田邑陵に禮拜す、更に徒歩十數町にして太秦村に至り、第五十五代文德天皇田邑陵に禮拜し、夫れより花園村に出て竢たせ置きたる自動車に乘り梅畑に出づ、梅畑八幡宮は和氣淸麿が宇佐八幡を勸請せしものなりと云ふ、車上より遙拜して過ぐ、此邊より農家の婦女子が、張板や梯子等の家具を二三品づゝ頭上に戴きて、販賣の爲め京都市に往く者を多數見受けたり、動容服裝なぞは矢張大原女の如し、是れより淸瀧川に沿ふて周山街道を進